



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861

洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 中條 智子

●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」（ubumwe）とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

ルワンダでの活動

15 周年を迎えて

佐々木 和之

ささき かずゆき

皆さま、2020 年も早二カ月目に入りましたが、いかにお過ごしでしょうか。今年は私と恵の結婚 30 周年、私がルワンダを初めて訪れてから 20 周年、ルワンダで活動を初めてから 15 周年、プロテスタント人文社会科学大学（PIASS）の平和学教員としての活動は 10 周年にあたります。このように長期間ルワンダで働いてこられたのは、皆さまから息の長いご支援をいただいていたからに他なりません。

今後 5 年間も PIASS に拠点を置き、アフリカ諸国の平和構築を担う人々の育成を活動の柱として取り組んでいきたいと願っています。しかしこれからは、私が教師として教育活動を担い続けるのではなく、海外の修士課程を終えた卒業生たち

を教育活動に巻き込みながら、やがて彼ら自身が平和紛争研究学科を担っていくことができるように、必要な支援をしていきたいと考えています。それと同時に、私がルワンダの「和解の現場」で経験してきたこと、学んできたことを文章にまとめる作業に時間を使っていきたいと願っています。どうかこれからもお祈りとご支援をよろしくお願い申し上げます。

■ 2019 年度帰国報告

ご存知のように、11 月 9 日からの一カ月間、報告・講演活動のために一時帰国をさせていただきました。計 11 都道府県（北海道、埼玉、千葉、東京、神奈川、静岡、大阪、兵庫、広島、福岡、沖縄）を巡りましたが、今回も多く日本の皆さま

< お知らせとお願い >

東京外国語大学・現代アフリカ地域研究センターが今年度以降も PIASS からの留学生を受け入れるため、クラウドファンディングを実施します。目標金額は 100 万円、実施期間は 4 月 15 日～5 月 31 日の予定です。追加の情報が入り次第、支援会のホームページやフェイスブックに掲載いたします。ご協力をお願いいたします。

まとルワンダで進められている平和と和解の働きについてお分かちできたことを嬉しく思っています。今回強く感じたことの一つは、報告会で出会う方々の中に、ルワンダにスタディーツアーで行ったことがある、ルワンダで仕事をしていた、あるいは、PIASS に留学していたという方々、特に若い方々がかなり増えたなということです。そして、その方々の多くが、「ルワンダ繋がり」で帰国後も交流を続けておられることを知り、嬉しくなりました。

また、一時帰国中の6日間、PIASS から東京外国語大学に留学中のオクターブ・カベラさん（ルワンダ人）とヘレン・アリネット・ミカンダさん（コンゴ人）を沖縄に連れて行き、平和学習ツアーを実施することができました。平和学習ツアーのそれぞれの訪問地でお世話になった皆さま、特に今回も宿泊場所を提供してくださった、那覇新都心キリスト教会の岡田有右・富美子両牧師に感謝申し上げます。

■ 謝罪集会の報告

一時帰国の直前の10月26日、東部州キレヘ郡ルガンド村で、虐殺生存被害者のサラビアナ・ムカガタレさんに4名の虐殺加害者が謝罪するための集会が開かれ、私と7月末に東京外語大での留学を終えて帰国したムレカテテ・シュクルさんが出席しました。当事者である加害者男性4名と彼らが参加している養豚組合の人々が主体的に計画した集会でした。

ほぼ昼の12時頃に始まった集会の初めに、REACH の元職員で、今もキレヘの活動のフォローアップをしてくださっているオーグスティン牧師による挨拶、祈り、聖書からのメッセージがありました。メッセージはマタイによる福音書7章13～14節、「狭き門から入れ」の箇所からなされました。ジェノサイドの時、多くのフツの人々が体制に同調し、広き門から入っていった。しかし、

中には命がけで狭き門から入った者がいたことを忘れてはならない。そして、ジェノサイドで大きな罪を犯してしまった人々の中にも、その後、そのことを悔い改め、謝罪と償いの道を歩むという、狭き門を通過してきた人々がいる。私たちは、主イエス・キリストに狭き門から入るようにと招かれている、というメッセージでした。

メッセージの後、来賓と集まっていた人々の紹介があり、その後、加害者による謝罪がなされました。今回謝罪したのは、ベルナールさん、エヴァリストさん、ポールさん、エスタシさんの4名。ラファエットさんもこれに加わる予定でしたが、お連れ合いが病気で謝罪の会に向けての準備に参加できずに断念しました。ルガンド村の養豚組合のメンバーの中で、サラビアナさんに謝罪を済ませていないのは、これでラファエットさんだけということになりました。

一人ずつ立ち上がって、2・3分程度の短い謝罪がなされました。私はそれらの謝罪を聴き、まず罪責告白の部分が短く詳細に欠けるという印象を持ちました。彼らがツチの人々への襲撃に参加し、サラビアナさんたちがナタで切り付けられ、殺されていった現場にもいたこと。ナタを振り下ろしたのは自分ではないが、自分もそこにツチを殺すためにいた。だから命令されていたら、自分がサラビアナさんにナタを振り下ろしていた、ということ簡潔に語ったのでした。その場にいただけではなく、自分もナタを振り下ろした者になり得たこと。その意味では、実際に殺害に関与した人たちと同罪であることをはっきりと認めていたことは評価に値するものでした。最後に謝罪したエスタシさんは、「私たちは多くのツチを殺した」と表現し、自分たちが殺人者の立場にあったことを明確にしました。言い訳がましい言葉はありませんでした。しかし、なぜこれほどまで謝罪に時間がかかったのかの経緯についての説明がなかったこと、そして、皆とても淡々と話していて、話しぶりから深い改悛の気持ちが明確には

見てとれない等の問題を感じたのでした。

この4名の謝罪の後、サラビアナさんが応答の言葉を述べるために立ち上がりました。彼女は声が潤れ、体調がよくないのが見て取れました。そして、彼女が語った言葉から、4名の告白と謝罪が彼女のところに響かなかったことを伺うことができました。「もっと皆さんは本当のことを語るべきだ。あの時とても多くの人たちが殺されました… 私は彼らの血が混じった水を飲んで生き延びたのです。私が今生きているのは、その無数の人々の血を飲んだからなのです… 私が這いつくばうようにして自宅に戻った後、私が生きていることを聞きつけた者たちが、息の根を止めるためにやってきたのです。しかし、私の母がお金を払って彼らを追い返し、私は生き延びたのです」といったことを語りました。そして最後に、「心の底から謝罪しているのなら、私はあなたたちを赦します」と言ったのでした。これらのことを語り続けた彼女の傍らには、彼女の腰に腕を回し、しっかりと支えるオーグスティン・カボゴさんの姿がありました。オーグスティンさんは彼女の従兄妹ですが、生き残った親族の家長としてその集会に出席していたのでした。

この後、オーグスティンさんが語り始めました。まず彼は、加害者の4名が勇気を出して罪を告白し、謝罪したことに感謝の言葉を述べました。そして、彼らの告白・謝罪が決して容易なことでは



サラビアナさんを支えるオーグスティンさん

ないのだから、そのことを分かってあげて欲しいとサラビアナさんに語りかけたのでした。そしてその後、加害者の一人ベルナールさんに語り始めました。ベルナールさんは、実はサラビアナさんと血縁関係にあるのですが、それにも関わらず、彼女の襲撃に加担したことに言及しました。「あなたの祖父はサラビアナの祖父で、いわばあなたたちは家族だったのだ。それなのになぜ彼女を守ろうとしなかったのか？」と問いかけたのでした。

そのしばらく後、オーグスティンさんは、目の前に座っている加害者4名をじっと見据え、「私たちはあなたたちを赦します」と語りかけました。その時の彼の眼差しは、決して優しい眼差しなどではありませんでした。力のこもった眼差しで、加害者たちをじっと見据えながら、言葉を振り絞るようにして「あなたたちを赦す」と語りかけたのでした。

その後、オーグスティンさんは、目の前のベンチに座っていた4人の加害者たちに、もう一度前に出て、一人一人、サラビアナさんに赦しを乞うように、彼らを招きました。そして、彼の背後に座っている生存被害者である彼の親族に対して、加害者たちを受け入れるために、前に出てきて挨拶するように促しました。そしてまた、加害者の親族も前に出てきて、被害者の親族と挨拶を交わすようにと呼び掛けたのでした。すると、木製のベンチを並べただけの特設会場の両側から人々が次々と立ち上がり、中央にいるサラビアナさんと4名の加害者たちの所に集まり、ルワンダ式のお互いに胴体を手をまわして抱き合う抱擁をしながら挨拶をしたのでした。

加害者は一人一人、サラビアナさんに「赦してください」と彼女に赦しを乞いました。それに対し彼女は、「もしあなたが心から罪を悔い改め、そう言っているのであれば、私はあなたを赦します」と、多くの人が挨拶を交わしている中、あらためてその場によく通る声で言葉を掛けていました。



キレヘ謝罪集会でのサラビアナさん

今回の和解の現場に立ち合わせていただき、私はいくつかのを感じ、ノートに書き留めました。第一は、今回の謝罪集会の問題点についてです。既に触れましたが、私が目撃した加害者たちの謝罪は、罪責告白の部分が短時間で詳細に欠ける形式的なもので、改悔の情がはっきりと見て取れるものではありませんでした。そのため、被害者のサラビアナさんは、彼らがどこまで自分たちのしたことを認めているのか、そして、それらを深く悔いているのかどうかを感じ取ることが出来なかったのではないのでしょうか。今から二年半ほど前のことになりますが、2017年9月、養豚組合の仲間のアンドレさんがサラビアナさんにした罪責告白と謝罪は、今回の4名よりもずっと具体的なものでした。またアンドレさんは、謝罪に至るまでの深い葛藤についても、時折緊張に身体を震わせながら語ったのでした（『ウブムエ』40号参照）。

第二は、考え得る中で最も良い謝罪が万一なされたとしても、凶悪犯罪の被害者が本当に納得できる謝罪というものが果たしてあり得るのだろうか、ということを率直に感ぜずにはおれませんでした。言葉を尽くして真実を語っても、加害者の改悔がしぐさや表情にどれだけ見て取れようと、サラビアナさんのようにナタで顔面を切り付けられたあげく、自分の頬から吹き出した血、そ

して、自分の周りで殺された人々が流した血の混じった水を必死の思いで飲み、生き残った人が納得できる謝罪などないのかもしれませんが。

それでは今回の謝罪の集会は無駄だったのでしょうか。私はそうは思いません。加害者4名が限界を持つものであったとしても、誠実に謝罪したことの意味は大きいのです。今回の集会が、サラビアナさんが歩んでいる長い長い癒しへの旅の一つのステップであって欲しいと心から願います。また、サラビアナさんと加害者たちの間に超えられない溝が残ったとしても、このような謝罪の取り組みは、双方の子どもたちがその溝を乗り越えていくための必要条件になるのではないかという気もしています。

第三に、ルガンド村の虐殺被害者と加害者の間にさらなる対話が必要であることを感じました。やはり、被害者の語りにしろ、加害者の告白・謝罪にしろ、一方向的に何かを語る、それを相手が聴くというコミュニケーションには限界があります。そこで昨年10月に、私が関わっているPIASSの「平和と開発センター」が四日間の研修会を企画した「修復的対話」（Restorative Dialogue）の手法がとても有効であることを感じました。被害者が言葉を発した後、加害者がその言葉に込められた意味をくみ取る努力をファシリテーターが支援する。それを、被害者が本当に自分の心の叫びを聴いてもらえたと思えるまで続ける。その一方で、加害者にも自分の思いや経験を語る機会を与え、被害者がその言葉に込められた意味を聞き取ることができるようにファシリテーターが支援する。アンドレさんの時には、そのような被害者・加害者間の対話を試みたわけですが、それを20名程度のグループですることも修復的対話の手法を使えば可能となることが分かりました。

第四に、癒しと和解のプロセスに関わるうえで大切な心づもりについて考えました。現在ある状

況を批判的に見つめ、そこにある課題や限界を認識する必要があります。ものごとを「赦しと和解」という言葉で安易に理想化して語ってはなりません。ただその一方で、問題や課題があるからと言って、それはだめだとか意味がないとするのではなく、目指すべき目的への途上にあるという認識を常に持つことが大切なのだと改めて感じました。

■ 「和解の理論と実践」講義終了

一カ月間の一時帰国を終え、12月初旬にルワンダに戻った後、平和紛争研究学科の3年生を対象にまず「アフリカ紛争論」、そして年明けから「和解の理論と実践」の講義を実施しましたが、2月1日に終了することができました。

「和解の理論と実践」の講義の終盤には、昨年につき、1月25日、キレヘで和解の歩み続ける方々5名（ルガンド村からサラビアナさんとタデヨさん、カブゾ村からオグスティンさんとセルディヨさん、そしてオグスティン牧師）をお招きしての特別授業を持ちました。また、講義の最終日には卒業生のアリスさんをキガリからお招きして彼女の証を聞き、対話の時間を持ちました。アリスさんは、無実であったフツの父親を報復的な殺害で殺されながら、後に加害者の一人であるツチの男性を赦した女性です。義母からも見捨てられて孤児同然になりましたが、苦勞して高校を卒業した後、親族や友人たちの反対にも関わらず、ツチの虐殺生存被害者の男性と結婚し、お互いに支え合いながら家庭を築いてこられました（『ウブムエ』40号参照）。

今回も「暴力紛争や凶悪犯罪の後、どのような過程を経て当事者同士の和解の可能性がひらかれていくのか」、というテーマのもとに講義を進めてきましたが、講義の前半、特にムランビ虐殺記念施設を訪ねた後には、学生たちは口々に「そんなこと不可能だ」と言っていました。しかしそ

れが、「とても難しいことだが、（神の助けにより、あるいは必要な条件が満たされることにより）可能なのだ」と思えるようになったこと、そして、癒しと和解の歩み続ける方々と出会い、彼らの物語の中に希望を見出すことができたことが最大の収穫でした。

講義は終了しましたが、学生たちは今最終レポート作成のため、自らの人生における癒しと和解の課題に向き合い、講義で学んだ一つ一つの事柄が、どのようにその歩みの助けとなるかを考察する作業を進めています。講義最終日、最後の二時間ほど参加者みなで輪になってお互いの経験や思い、講義を受けての感想等を分かち合う時間を持ちました。過去あるいは現在の痛ましい経験から癒されず、自分を傷つけた他者を赦せない思いを涙ながらに語る者も数名いました。そう容易には深い傷が癒されることはないし、加害者を赦すことはできないけれども、和解を人生の旅（プロセス）として捉えること。そして、その長く困難な旅の途上で、神が働いてくださることによって何かが起きるかもしれない。今はかすかな希望なのかもしれないが、その希望を決して諦めないこと、分かち合っていくこと、そして、受け継ぎ、引き継いでいくこと。これらの大切な事柄を皆で確認し、講義を終えることができました。



和解特別授業の後で

課題はある。でも乗り越えていける！

佐々木 恵

ささき めぐみ

■ ウムチョ・ニャンザのクリスマス ―そして彼女たちの課題

クリスマスが過ぎた 12 月 27 日、ウムチョ・ニャンザの女性たちとクリスマスの交わりの時を持ちました。活動に関わっているボランティア（私と日本人学生）やインターンシップの学生、PIASS の「平和と開発センター」の職員、そして冬休みの間を利用してワークショップに参加していたウムチョ・ニャンザの子どもたちも参加しました。クリスマス会では、子どもたちがワークショップで学んだフォーラムシアター（＝参加型演劇／観劇のあと、観客も演じる側と一緒にその劇のテーマについて考えながら参加していく形の演劇で、現場の意識を向上させるための目的に使われるものです。）を披露してくれました。日本人学生からはストリートダンスが披露されて盛り上がり、みんなで一緒にトウモロコシやヤギ肉の串焼きをいただいたのでした。

この日、とても印象的だったのが、先ほどのフォーラムシアターで子どもたちが問題提起したことでした。母親であるウムチョ・ニャンザの女性たちが活動で得た収益金をどのように分配するかというのが、そのテーマの一つだったのです。

現在、ウムチョ・ニャンザの女性たちの主な活動の収益金は、彼女たちの作ったアフリカ布のブックカバーや布バッグの売上金です。昨年度までの二年間は、毎週水曜日に集まってブックカバー作りをしてきました。その収入の一部は、一年間の国民健康保険費を家族 6 人分受け取るという形で一律に分配されてきたのですが、去年（2019 年 5 月）から新たに布バック製作がはじまったことで、女性たちの関与の仕方に差が出てきたので

した。裁縫の得意な人そうでない人、時間に余裕のある人ない人、健康な人、病気がちの人、そういう個人差が製作に充てられる時間に大きな差を生み出し、また、それに伴って技術にも開きが出てきたのです。時間に余裕のある人は水曜だけでなく、ほかの日も工房に出かけて製作に励みます。一人で 20 枚以上も仕上げてくれたメンバーも複数人いたのです。そんな中、きっと、母親たちの会話の中に同じ分配金では不公平だという話もでたのでしょうか？子どもたちの劇では、メンバーの子どもたちの日常会話という形でその問題が取り上げられ、演じられたのでした。劇の後には全員が参加して話し合いがもたれ、活発な討論になりました。結論は出なかったものの、自分たちが今抱える問題を可視化し、共に考えるいいきっかけになったのでした。

さて、年が明けて 1 月 29 日のことになるのですが、クリスマスに子どもたちから提起された問題「収益金をどのように用いるか？」をウムチョ・ニャンザの女性たちと話し合う時間を持つてきました。クリスマス会から昨日までの一ヶ月の間に彼女たちの間でもこのことは色々と話し合われてきたのでしょう。すでに女性たちの間に大きな意見の対立が生じているのは明らかでした。意見はだいたい以下のように二つに分かれていたのでした。

- 1、これまでと同じように、個人が製作にかけた時間は違っても、メンバーに一律に同じ金額を支給する。
- 2、作品一枚に対する縫製代の額を決めて、各人が製作したバッグの数によって収入を計算して支給する。

和之と恵はウムチョ・ニャンザの作品を日本帰国時に教会や帰国報告会等で販売しているのですが、去年秋の帰国時には布バックだけでも60数枚を完売して、収入も相当な額になりました。女性たちは、バッグ一枚につき販売価格の3分の1を縫製代として個人が受け取ると決めていたようですが、日本での販売価格は、日本とルワンダの物価の違いやその他を鑑みて、現地の販売価格よりおよそ3倍で販売しているのです。この3分の1の縫製代という決定に従えば、一枚につき6,000フラン(約720円)となり、布バッグの縫製代としては破格の金額になるわけです。このレートでは、各人の収入に大きな格差を生み出し、メンバー間に摩擦を生じさせることは目に见えていました。

「和解と共生」を目的に集まっているこのグループの本来の目的から外れる事にもなり兼ねないこの3分の1という決定を見過ごしにすることはできません。しかし一方、一生懸命布バッグの製作に励んだメンバーにとっては、それに見合った報酬があっても当然のことでしょう。製作に意欲的に関わったフランソワーズさんは、このように訴えていました。「腰が痛くなるほど頑張っている私は製作に励みました。そのことはみんなもわかっていると思う。それなのに、その見返りが何もないのは残念だ」と。ほとんど活動に出席できない人もいる中、同じ金額の支給では不満に感じるのも分かりますし、その彼女たちのコミットメントがウムチョ・ニャンザの仲間に認めてもらえないもどかしさもきっとあるに違いないと感じたことでした。確かに各人のコミットメントの度合いが個人の収入に反映されれば、女性たちの製作意欲が増し、ウムチョ・ニャンザの活動もより活発になると思います。女性たちの活動が寿命の長い、真に生活向上に繋がる活動に展開していくための知恵が今、必要とされているのです。

さて、今回の話し合いでとても印象的だったことがあります。その一つは、これまで、あまり意

見をいうことのなかった加害者を夫に持つ女性たちが反対意見を堂々と表明していたことでした。また、女性たちの中にこのような意見の食い違いはあるものの、このことを乗り越えるべき課題として彼女たちがしっかり受け止めていることでした。「協同組合を立ち上げるための講習会でも、活動が進展していく中で金銭に関する問題が必ずや出てくるということを私たちは学習しました。ですから、今回のこの問題も決して悪いことではなくて、自分たちが成長している証なのです。ですから、みんなで解決していきましょう。」と代表のアルフォンシンさんは締めくくったのでした。女性たちは今回のこの問題をどのように話し合い、解決していくのでしょうか？わたしは、この3分の1という割合を最初に耳にした時に、実はとてもびっくりして、その問題性を女性たちに訴えています。そしてその進展をハラハラしながら見守ってきました。でも、今回の話し合いに参加して、女性たちがこの問題にしっかりと向き合い、自分たちの問題として取り組んでいる姿を見ることができました。ウムチョ・ニャンザとしての成長を確かに感じたのです。話し合いの最後に、いつも力強い祈りをしてくれるローズさんが、その日の問題を一つ一つ丁寧に取り上げて、長い祈りをしてくれました。どうぞ、女性たちに知恵が与えられ、ウムチョ・ニャンザとして共に成長していけるようにお祈りください。

ウムチョ・ニャンザは、今フル活動で布バッグの製作に励んでいます。大口の注文があり、10日



話し合いの後、共に祈る女性たち

以内に 210 枚を作らなければならないのです。昨日工房に出かけた時には、体調が悪くて休みがちだったエレナさん、アルフォンシンさん、そしてこれまで縫製が苦手と訴えていたリベラタさんもミシンに向かっていました。上手な人が苦手な

人の最後の仕上げを手伝っているのも目にしました。私たちは確かに色々な課題を抱えています。それでも、きっとそれを乗り越えつつ前進していけると手応えを感じることができたのでした。

事務局からのお知らせ

- 佐々木和之さんがルワンダで本格的に活動を初めて約 15 年。この間、唯一無二の働き人として、現地での活動と帰国報告という多忙な日々を過ごしてこられました。

ようやく今年、8 月以降の約 2 ヶ月間、長期休暇を取り、心身の静養と研鑽の時を持っていただくことになりました。2020 年は報告のための帰国予定はありません。ご理解ください。しかしルワンダでの“平和構築を将来担う若者を育成する活動”は変わらずに進められていきます。お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。

● PIASS 開発学部学生 2 名、東京外国語大学に留学！

東京外国語大学（現代アフリカ地域研究センター）に、PIASS 開発学部より 2 名の学生（平和・紛争研究学科ヘレン・アイネトゥ・ミカンダさん、自然資源・環境マネジメント学科オクターブ・ガヒルウェ・カベラさん）が、7 月までの約一年間留学しています。諸教会・諸団体におかれましては、留学生から話を聞く機会の提供などをご検討ください。

● 「ピースビルダー育成プロジェクト」への寄付をお願いします！

支援会では、佐々木さんが取り組む“平和構築を将来担う若者を育成する活動”に、皆様の支援金を用いてきました。しかし現在、支援会や積立金からの支出が困難になっています。そこで、この活動のために、「ピースビルダー育成プロジェクト」への寄付をお願いしています。内訳は、PIASS で学ぶ学生への奨学金 60 万円、PIASS ピースクラブ活動費 20 万円、日本に留学する留学生への学習支援 20 万円の計 100 万円です。振替用紙に「育成支援」と明記してお送りください。2020 年 1 月現在 393,500 円のご寄付が送られ、心より感謝しています。現在も受付継続中です。

- ウブムエ 47 号を支援会の皆様に発送する際、2018 年度会計監査報告を同封しました。ところが監査報告で 2018 年度とすべき箇所を 2017 年度と記載する間違いがありました。お詫びして訂正します。
- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会 HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HP から入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 中條智子（長住教会牧師）、加藤 誠（大井教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）